

新刊

□御勢久右衛門（編著）：**和州吉野郡群山記—その踏査路と生物相**. B5. 282 pp. 1998. ¥10,000 + 税. 東海大学出版会. ISBN 4-486-01420-0 C3040.

和州吉野郡群山記は、紀州藩の本草学者畔田翠山(1792–1859)が、紀伊半島内陸部で行った天産物調査記録を集成したものである。調査範囲は現在の奈良県の南半分に相当し、吉野山をはじめ大台ヶ原山、大峰山、伯母子岳など、紀伊半島の主要山岳を網羅する。巻頭のカラー頁に、踏査ルートが1:20万図上に網の目のように示されていて、その総延長は、ざっと見て4–500 kmあるだろう。それも、同じコースを何度も歩いているはずだから、踏査の総延長は何倍にもなると思う。現在の地図には載っていないルートも少なくないだろうに、編著者は地元とはいえ、よくもこんなルートを再現したものだ。たとえば大峰山脈東側の下北山村前鬼から西側の十津川村花瀬へ行くために嫁越峠へ達する道は、現2.5万図に残る西向きのルートよりは、南に向かって山腹を登り、峠へ直進する道が、両村を結ぶメインルートだったようだが、この道は旧5万図には出ているが現2.5万図では描かれていない。今では一番細い道路記号さえない尾根筋に、標高点だけが点々と記されていて、これが往時のトレイルだったのかと思わせるところもある。翠山は従者一人と案内人を連れ、丹念に記録をとりながら歩いたとのこと。博覧強記の人ようで、たくさんの動植物の彩色図や地図を残している。地図は当時の習慣に従った鳥瞰図だが、山名、河川名、集落名、尾根筋の地名や建物（神社、寺、宿坊、茶屋、行場など）、階段まで、丹念に記録されている。この地域は山はけわしく住民は少なく、川は極端に蛇行していて道はなかなかほかどらず、歩きにくい地域である。むかし紀勢線が全通していなかった頃、矢の川峠（ヤノコトウゲ）から北山川の上流に降りて湍峡に向かったことがあるが、地図上では1 kmも離れていないのに、川の蛇行のおかげで1時間以上も歩かされ、ウンザリした記憶がある。自動車で走るようになってからも、本流沿いはともかく、支流に入ると家屋が目につかなくなり、今でも過疎地帯とを感じる。徳川時代末期なら、「人煙稀」という形容が当てはまるのだろうが、彼の地図や記述では、この地域は現代よりも人の出入りが多

かったように感じられる。修験道の本場だからだろうか、あちこちに茶屋、宿坊、神社仏閣等の建築物や階段、梯子などの施設が見られ、これらの維持運営に要する経費、物流、交通などの経済活動は、莫大なものだったと思われる。ジャガイモはすでに行き渡っていたが、サツマイモは導入初期で、うまくなかったらしい。

巻頭の図版に、翠山自画の「釈迦岳西の方より見る図」がある。七面山を手前に釈迦岳を遠景に配している図だが、その二つの山の間を走る谷に人家が散在し、あちこちに地名が記してある。現在の地図と見比べると、この谷は宇無ノ川にあたり、人が住んだり往来したりした痕跡がありそうにない。現在の地図の釈迦岳が翠山の時代の釈迦岳と同じとは限らないが、彼の時代には、前述のように現在より人の生活が多かったような印象を受ける。もう一つ、この図をみて「オヤ？」と思ったのは、釈迦岳頂上の左手遠方に「駿河富士山」と記したピークが小さく描いてあるのだ。私は紀伊山地の稜線を歩いたことはないで、そこから富士山が見えるかどうか知らないが、高度と前山がないことから考えて、見えたのだと思う。「富士山がどこ迄遠くで見えるか」は、地図愛好家の有名な問題であり、計算法がいろいろ工夫されてきたが、数値地図の出現とカシミール（「可視見る」のもじり）というソフトの開発で、誰でも容易に任意の地物の「可視マップ」（「東京スカイツリーが見える範囲」というような）を作れるようになった。そして富士山が見える西限は、那智の妙法山(749 m)（紀勢本線那智駅の西北西5 km。三省堂：日本山名事典による）ということになっている。この事典は位置を秒単位で記録しているので、両者のそれを比較したところ、妙法山の方が釈迦岳より1分11秒（約1800 m）西にあることがわかった。もっとも先年の東日本大震災で、わが国の地物は位置も高度もさまざまに動いているので、可視マップを見直す動きもあるだろう。

本書にはクロユリが記録されている。翠山は若い頃立山や白山を訪れているので、見逃さなかったのだろう。クロユリは1934年までの記録はあるが、それ以後は見つかっていないとのことである。

翠山の地図を見て考えるのは、この地域は紀州だったのか？ということである。今のセンスではここは奈良県つまり大和の国で、紀伊の国ではない。本の題に「和州吉野郡」とあるのだから、翠

山自身も異国であることは認識しているはずだ。紀州藩の人である翠山が他国の大和に入って、こんな詳細な地図を作っているのを、よくも見とがめられなかったものだ。こういう「兵要図」は各藩の軍事機密で、見つかったら普通なら命がない。彼はそういうことには頓着なく、至極平然・公然と調査を続けている。紀州は徳川御三家の一つだから、その権威に守られていたのだろうか。何はともあれ、結果的にはこのような博物学的記録を残してくれたのだから、ご同慶の至りと言うべきである。(金井弘夫)

□矢野興一：観察する目が変わる 植物学入門。A5. 223 pp. 2012. ¥1,700+ 税。ベレ出版。ISBN 978-4-86064-319-5 C2045.

意外と知らない植物のつくり、という副題がある。植物の観察というと、名前を調べることが目的のような風潮があるが、本書では植物のいろいろな部分の形や性質に注目して、その目的や役割を理解することによって、自然を見る目を豊かにしてもらおうと意図している。1. 植物とは(4頁)、2. 根(8頁)、3. 茎(13頁)、4. 葉(21頁)、5. 花(82頁)、6. 果実(16頁)、7. 種子(4頁)、8. 植物の戦略(17頁)、9. 植物の分類と名前(5頁)の9章より成る。()内は見出し頁やメモ頁を除いた実質頁数で、「根」の章は、こういう一般向けの他書にくらべて、多くの頁が使われていると思う(比較したことはないけれど)。とくに、茎、胚軸、根の認識はむづかしく、私もうまく説明できない。多くの(というより全部の)学生ばかりか、アマチュア観察者にとっては、「地下にあれば根」が常識だ。同様に節と節間も、植物体の説明に欠かせない単語なのに、竹や笹の節を知っているだけなので、少なくともこの程度の注意喚起は必要と思う。

「～学入門」というと、堅苦しい基本原則ばかり並んでいるように思えるが、教科書的でなく、読み物的に書かれているので、一通り目を通しておけば、それ迄持っていた知識に多くの追加ができて、その後の自然観察の目が広がることだろう。そういう目であらためて植物を見直せば、ここに書かれていないいろいろな現象が見えてくることと思う。私もこういう本が書けたら、授業が楽になるだろうな、と思う。白黒写真のコントラストが弱くて鮮明さに欠けると、西本眞理子氏の植物画が、必ずしも本文の説明用に描かれたもので

はないように思えるのは惜しい。(金井弘夫)

□徳川林政史研究所(編)：森林の江戸学。A5. 292 pp. 2012. ¥2,800+ 税。東京堂出版。ISBN 978-4-490-20764-4, C1021.

中学生から大学生の頃は敗戦直後の復興期で、東京の高尾山あたりでも、山腹一面のスギ林が、行く度に丸裸にされ、それが滑り台のように組まれた中を、材木が勢いよく落ちて行くのを見ていた。採集に行っても、沢沿いの道はみんな梯子を渡したような木馬(キウマ)道になっていて、足を踏み外さぬようにその上を渡って行くしか山へ入る道がなく、採集する植物に目を配る余裕はなかった。やがてチェーンソーの導入に伴って伐採の効率が上がり、林道の整備やワイヤーの利用で作業・集材能力が向上し、林野庁は生産効率の悪い天然林の皆伐計画を立てて、人工造林地の拡大をはかった。しかしその後、低価格の外材に押されて林業は不振に陥り、自然保護思想の発達につれて、天然林の人間生活全般にわたる重要性が認識されるようになった。さもないと私たちは、広大な植林地の中にわずかに残された「見本林」を、「もとの自然」として見ることになったろう。本書は徳川時代の記録に基づいて、主として木曾の幕府御用林の運用とその変遷について、きめ細かく記述されている。

戦国時代から、城のような大建築物が簡単に破壊炎上されたかと思うと、次の覇者によって忽ち新築されることが繰り返されてきた。その都度巨大な建築材が大量に必要だったことは想像に難くない。それ以前でも、天皇が代わるたびに遷都が行われていたし、もっと遡って664年の白村江の海戦では、日本から400隻もの軍船が参加している。だから徳川時代の頃には、近場の山林では大材は得難くなり、山奥深く、稜線近くまで入って適木を選び、それを切り倒して山腹を引き下ろし(木落とし：諏訪神社の御柱祭はこれの遺習)、溪谷を利用して本流まで運び、筏を組んで河口まで流し、そこから船に積んで目的地近くの港へ運んでから、更に陸路を現場まで送るという作業を指揮監督する役人組織、商人組合、作業集団などができ上がっていたことが、多くの資料に基づいて語られている。

火災消失した江戸城西丸の再建のために、特命を帯びた奉行が、4ヶ月ほどかけて飛驒の御用林を廻り、山中に小屋掛けして一本一本選定したも

の、現場の地形が搬出に日数がかかり過ぎるとの判断で、あらためて木曽側へ廻って選定し直したけれど、それらが江戸に着いたときには、再建工事はあらかた終わっていた、という記録もある。ということは、どこかで相応の大材が調達されたのだろう。選ばれた大材には、長さ 13 間、直径 5 尺 6 寸、樹齢 1000 年を超えるものもあったそうだ。伐採された材木は、両端が鉛筆の先のように角錐形に形作られていて、その理由は、大材を挽く鋸がまだ発達しておらず、伐採には斧が主流であったことと、水流で搬送するときの衝突で先がささくれて、ひびが入ったり、腐朽がそこから広がったりするのを防ぐためだったという。

当時の林業は建築材調達のための択伐で、その跡は自然更新にまかせていたが、時代が進むにつれて苗木の育成や施肥の必要が認識されるようになり、とくにいわゆる里山では、農民生活の需要に応える必要もあり、そのための為政者と庶民のやりとりが記録されている。

最後に「村の生活と森林」という短い章があるが、ここではいわゆる民俗植物学的なトピックが並んでいる。鈴木牧之の「秋山紀行」は、今でも辺境中の辺境とされる信越国境秋山郷の記録(1828)であるが、焼き畑農耕で粟が主食のこの地域の産物が意外と多く、採集(トチやクリ)、狩猟、漁業、木工、繊維(イラクサ)、鉱業(銅)などの産物の取引のための商人の出入りばかりか、それらの売りさばきのために、村人の域外への出稼ぎも盛んであることを記録しているという。「隠れ里」という形容は、とても当てはまらない。

われわれは現代の常識で過去を理解しがちだが、先人がどのように生活していたのかを、正しく認識する必要がある。(金井弘夫)

□清水康弘(編著): **水前寺菜の科学 その魅力と不思議を追って**. A5. 272 pp. 2012. ¥3,200+ 税. アボック社. ISBN 978-4-900358-70-6 C3045.

スイゼンジナ(*Gynura bicolor*)は熱帯アジア原産のキク科植物で、その和名は熊本の水前寺にちなみ、食用野菜として暖地で稀に栽培されている。また金沢周辺ではキンジソウ(金時草)として、同様に栽培される。1. スイゼンジナとは、2. ひご野菜「水前寺菜」—熊本での取り組み、3. 石川県での金時草栽培と研究について、4. 色と香りを読み解く、の4章より成る。本書は一般向きに、水前寺菜の効能に理解を深めることによって、

特用作物としての栽培意欲を刺激し、市場の拡大に資することを目的としていると思われ、最後には「おすすめレシピ」が10品も紹介されている。しかし、編著者の意気込みのあまり、それぞれの章がてんでに主張を並べたような感じで、全体の統制がとれておらず、どういう読者を想定したものかわからない。とくに全272頁中123頁を占めている4章は、学会発表のような印象で、その前後の文章をたどれた人でも敬遠するだろう。この章は、もっと砕いた、前後の章と一続きの内容のものにしてほしかった。成分分析の手法などは、一般の人には雲の上の出来事なので、それを正確さのレベルを下げてでも分かりやすく解説してくれたら、読み物としてユニークなものになったろう。出版側と調整の余地がなかったのだろうか。

(金井弘夫)

□田中孝幸: **品種論**. A5. 162 pp. 2012. ¥6,900+ 税. 東海大学出版会. ISBN 978-4-486-01839-1 C3045.

著者は蔬菜花卉園芸学専門。「品種」というタクソンは自然分類学の領域では、重要性の低いレベルの生物群と見なされている。一方農学や園芸学の領域では、品種は極めて価値の高い重要な集団で、経済的利益がからむこともあって、慎重な管理維持の下で、その形質が保たれている。それらの多くは交配の結果として作り出されたもので、元になった親がわかっており、つまり「系図」がはっきりと記録されているし、染色体、アイソザイム、DNAなどの解析によって、その「先祖」を調べることができるようになった。一方、花卉などの流通市場では、ちょっとした色変わりとか枝変わりも、「品種」として同じレベルで扱われている。本書は「栽培品種」をその起源に遡って階層的に整理し、その学名を野生種の学名と整合するような国際栽培植物命名規約での定義付けを行う試みである。

属、種、変種、概念; 品種の概念と定義; 品種群の概念と定義; 分類学的な品種の分類; 生殖的隔離: 生物学的分類と人為分類; 品種の成立; 栽培化された植物の特徴; 雑種起源の種; 品種の固定と弱勢化; 品種登録および同定; 品種名の表し方の12章より成り、付録として、定義のまとめ、学名記載法のまとめが各1頁ある。

本書では品種群(Supercultivar)というまとめを用意して、野生植物の変種に対応させ、その中に

品種に相当するランクを国際栽培植物命名規約に沿って記述する、というやり方で、国際植物命名規約との整合をはかる、という案が、*Brassica* を例として提唱されている。野生植物の例としては、著者が研究したヤブツバキとサザンカの交雑による、多くの栽培品種についての解析結果が引用されている。

一方、野生種では多くの場合、表現形質の違いの大きさを練達目で評価し、その差が「大きい」場合に種を、「小さい」場合には品種や変種や亜種を区別する、ということが行われており、染色体、アイソザイム、DNA などの解析は後から行われる、という習慣があるように思う。野生種は栽培植物のように「作り出された」ものではないし、栽培という条件になじまないだろうから（だから栽培植物にはなれなかった）、あらためて「系図」を作るのは時間がかかりすぎるのだろう。

栽培品だと、交配もあれば接ぎ木もあれば組織培養もあれば、遺伝子工学的に他種（ときには動物）の遺伝子を取り込んだりすることも実際に行われているから、それらを一々定義付けして命名規約の中に取り込むとなると、対応しきれなくな

る心配もある。

私のように、具体的にタクソンを扱うことをしていない人間が、命名規約の問題に嘴を入れることは筋違いと思うので、表面的な紹介に留める。解析技術の精密化に伴って、近い将来「種の定義」が物質レベルでの一般解として定義付けられるだろう。それが、われわれが従来認識していた「種」と整合性をもつのか、動物・植物・菌類で同じスタンダードが通用するのか、しないとすれば（この方が確率が高そうだが）、「種」というものの認識をどのように見直せばよいのか、植物分類学の分野でも身構えておく必要はないだろうか。既に認知されている個々の「種」について、物質レベルでの探究が必要となり、それは「分類学」分野の仕事として残されるだろう。染色体にせよアイソザイムにせよ DNA にせよ、好きな植物群の好きな所だけ調べて、「当たり」があった植物群について論文を書くというやり方を否定するつもりはないが、「この植物群のこの性質については当たりがない」ということも、一々確認しておく必要はないだろうか？

（金井弘夫）